

児童の友人関係に関する個人別態度構造の分析（2）

PAC(Personal Attitude Construct)Analysis on Friendship in School Age Children(2)

友生 雅夫*・今林 俊一**
TOMONO Masao・IMABAYASHI Shunichi

キーワード：個人別態度構造の分析、自己概念、友人関係、児童
Key words：PAC Analysis、self-concept、friendship、children

1. 目的

友生・今林(2001)では、質問紙や行動観察に個人別態度構造の分析(PAC分析、以下同様)を併用することによって、個々の児童が友人関係をどのようにとらえ、どのようなかかわりを求めているのか明らかにしていった。その中で、質問紙や行動観察からは、被験者の概要を、PAC分析からは、被験者の内面を細かく理解することができた。また、PAC分析を時系列的に行うことによって、友達のかかわりによって、個人別の態度構造がどのように変化するかをとらえることができた。

本研究では、さらに継続的に行動観察したり、PAC分析を併用したりすることによって、友達のかかわりによって、学級編成後の個人別の態度構造がどのように変化していくのかを教育実践を通して明らかにしたい。また、PAC分析の連想刺激を変えることによって、被験者の内面にある友人関係をより多面的にとらえることの可能性について検討したい。

2. 方法

2. 1. 調査対象者

鹿児島県内公立小学校5年生被験者A(女兒1名)。

2. 2. 調査期日

2001年3月～2002年3月

2. 3. 調査場所

調査対象者の所属する教室及び、教育相談室で

実施。

2. 4. 調査材料

〔児童の個人別態度構造〕

内藤(1997)によって開発されたPAC分析を用い、児童の友達に対するイメージや態度を個別に分析した。まず、友達がいいと感じるとき、そのときの心や体の様子を教示し、連想反応を得た。次に、重要項目順にならべさせた連想項目の類似度を4段階で評定させ、ウォード法で、各クラスターのイメージや併合理由、単独の＋イメージを求めた。

3. 結果

3. 1. 2001年3月のPAC分析***

連想刺激を「友達っていいなと思うところはどんなところですか」とし、そのイメージについて話してもらったところ、連想項目およびクラスター分析の結果は、Fig. 1のようになった。

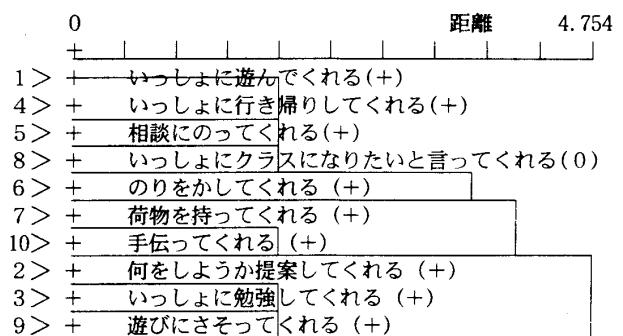


Fig. 1 2001年3月の被験者Aのデンドログラム

1) 左の数値は重要順位
2) 各項目の後ろの()内の符号は単独でのイメージ

* 鹿児島市立宮川小学校

**鹿児島大学教育学部学校教育(教育心理学)

***2001年3月のPAC分析の結果は、友生・今林(2001)に発表したものをケースの継続的な変容を検討するためにまとめ直したものである。

〔被験者Aの重要順位と項目の＋イメージ〕

重要順位の高い順に①いっしょに遊んでくれる②何をしようか提案してくれる③いっしょに勉強してくれる等となる。Aは友達に受身的で、働きかけを待っている。項目の＋イメージは、＋が9、0が1とプラスのイメージが強い。

〔被験者Aによるクラスターの解釈〕

クラスター1は、「いっしょに遊んでくれる」～「のりを貸してくれる」の5項目：「いっしょに遊んでくれる」は、クラスメイトのBとY(女兒)がAを昼休みや下校時に遊ぼうと誘う様子。

「いっしょに行き帰りしてくれる」は、登下校時にBを迎えに行ったり、一緒に帰ったりする様子。「相談にのってくれる」は、男子がAに悪口を言うと、クラスメイトのYが言い返してくれる様子。「いっしょのクラスになりたいと言ってくれる」は、クラスメイトのBがいつでも一緒にいたいと言う様子、「のりを貸してくれる」は、授業でC(男児)やBが消しゴムを貸してくれる様子である。クラスター1から、遊びや登下校のときは、クラスメイトのBとのかかわりが多いがクラスメイトのYやCのかかわりがあることも分かる。

クラスター2は、「荷物を持ってくれる」～「手伝ってくれる」の2項目：「荷物を持ってくれる」は、クラスメイトのBとじゃんけんをし、荷物を持ちながら帰る様子。「手伝ってくれる」は、長縄のときにクラスの女子がAを励ましたり、Aが男子とけんかしたとき女子が言い返したりしてくれる様子である。クラスター2から、クラスメイトのBを含め女子全員と一緒に遊んでくれたり、励ましてくれたりする様子が分かる。

クラスター3は、「何をしようか提案してくれる」～「遊びに誘ってくれる」の3項目：「何をしようか提案してくれる」は、クラスメイトのBが、図工のときにどんな物を作るか遊びのとき何をして遊ぶか相談してくれる様子。「いっしょに勉強してくれる」は、クラスメイトのBとAの家で宿題をする様子。「遊びにさそってくれる」は、クラスメイトのBと隣のクラスのT(女兒)が遊ぼうと誘ってくれる様子である。クラスター3から、クラスメイトのB、隣のクラスのTが勉強や遊びのときに声をかけてくれる様子が分かる。

クラスター1と2の比較：共通点は、クラスのおとなしい人がAと一緒に話したりふざけたりしてくれること。違う点は、クラスター1は、クラスメイトのB、Y、W(女兒)のような大騒ぎしない人のこと。クラスター2は、B、Y、Wも含めた女子全体のことを表している。

クラスター2と3の比較：共通点は、クラスメイトのBといつでもどこでも一緒という感じ。違う点は、クラスター2は、クラスメイトのBが手伝いをしてくれること。クラスター3は、A自身がしないといけないことをクラスメイトのBも一緒に考えてくれることを表している。

クラスター3と1の比較：共通点は、クラスメイトのBがAのいやだったことやいじめられたときのことを聞いてくれること。違う点は、クラスター1は、クラスメイトのB、Y、N(女兒)、Wのように引っ張っていくタイプの人のこと。クラスター3は、隣のクラスのTのようにのんびりしたタイプの人のことを表している。

〔被験者Aについての総合的解釈〕

クラスター1について：「一緒に行き帰りしてくれる」では、AからBに声をかけることもあるが、「一緒に遊んでくれる」や「相談にのってくれる」、「一緒にのクラスになりたいといってくれる」、「消しゴムを貸してくれる」はクラスメイトのBが中心であるが、B以外の児童もAを守ったり、助けたりしてくれる様子である。B以外の児童のかかわりがあることでAは安心できているようである。〈自分を支えてくれている友達〉を示すクラスターである。

クラスター2について：「荷物を持ってくれる」は、クラスメイトのBとAが下校する様子、「手伝ってくれる」は、クラスの女子がAと長縄をする様子である。Aのクラスには、全員で遊ぶ日があり、長縄をすることもあった。Aは、最初、長縄を跳べなかったが、クラスの女子の励ましで跳べるようになった。12月のなわとび大会は、Aは長縄で大活躍し、クラスも好結果を残すことができ、Aも、クラスの女子もうれしかったようだ。〈自分を温かく励ましてくれたクラスの全員の女子〉を示すクラスターである。

クラスター3について：「何をしようか提案し

てくれる」、「いっしょに勉強してくれる」、「遊びに誘ってくれる」は、クラスメイトのBや隣のクラスのTと勉強したり、遊んだりする様子である。Aは、クラスメイトのBと、家から遠い所で遊ぶ機会が増えたようだ。Bを一層信頼し、心も安定してきている。〈自分を積極的にしてくれる友達〉を示すクラスターである。

全体について：全体の構造をクラスター間の関係としてみると、〈自分を支えてくれている友達〉→〈自分を温かく励ましてくれたクラス全員の女子〉→〈自分を積極的にしてくれる友達〉と図式化できる。Aは、クラスメイトのBに支えられている意識は強い。しかしながら、クラスター2のように特にAは手助けしてほしいときにほとんどの女子が手助けしてくれたことで自信が持てたようである。Aには、何でも分かってくれるBの他に理解してくれる友達が増えてきている。

3. 2. 2001年9月のPAC分析

被験者Aの学年は、5年生で学級編成があった。Aは、運動に対して苦手意識が強く、また、友達を作ることも苦手としていた。そこで、学級編成では、Aと4年生のときに親しかったクラスメイトのB、N、Yを同じクラスにした。Aの行動を観察すると、教室に一人である機会が昨年より減っていた。また、Aは、教育相談でも、昨年よりクラスが楽しいとか、男子の友達ができたなどの話をしてくれた。そこで、友人関係がはつきりする9月にPAC分析を行うことにした。

連想刺激を2001年3月と同様に、「友達っていいなと思うところはどんなところですか」とし、そのイメージについて話してもらったところ、連想項目およびクラスター分析の結果は、Fig. 2のようになった。

〔被験者Aの重要順位と項目の+-イメージ〕

重要順位の高い順に①けんかしてもすぐ仲直りできる②時間割など教えてくれる③何かをしているときに手伝ってくれる等となる。Aは友達からの誘いを待っているだけでなく、友達に働きかけるようになってきている。項目の+-イメージは、+が6、0が3とプラスのイメージが強い。

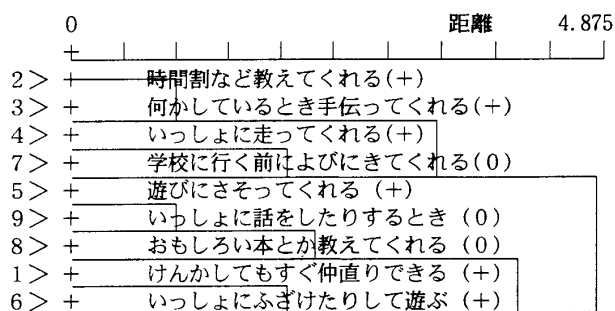


Fig. 2 2001年9月の被験者Aのデンドログラム
1) 左の数値は重要順位
2) 各項目の後ろの()内の符号は単独でのイメージ

〔被験者Aによるクラスターの解釈〕

クラスター1は、「時間割など教えてくれる」～「何かをしているとき手伝ってくれる」の2項目：「時間割など教えてくれる」は、クラスメイトのBはAが学校を休んだとき時間割を教えてくれる様子。「何かをしているとき手伝ってくれる」は、クラスメイトのYは、Aが重い荷物を持っているときなど手伝ってくれる様子。クラスター1から、クラスメイトのB、YはAが困っているとき手伝ってくれる様子が分かる。

クラスター2は、「いっしょに走ってくれる」～「学校に行く前に呼びにきてくれる」の2項目：「いっしょに走ってくれる」は、クラスメイトのB、Y、Nが体育の時間にAと走ってくれる様子。「学校に行く前に呼びにきてくれる」は、クラスメイトのBが、Aを学校に行く前に呼びに来る様子。クラスター2から、クラスメイトのB、Y、Nが走ってくれたり、呼びに来てくれたりする様子が分かる。

クラスター3は、「遊びにさそってくれる」～「おもしろい本とか教えてくれる」の3項目：「遊びにさそってくれる」は、クラスメイトのB、Y、NがAを休み時間に遊びに誘う様子。「いっしょに話をしたりするとき」は、クラスメイトのB、Y、NがAと友達のうわさ話をする様子。「おもしろい本とか教えてくれる」は、クラスメイトのB、Y、Nが図書室で本を紹介する様子。クラスター3から、クラスメイトのB、Y、Nと遊んだり、友達や本のことを話したりする様子が分かる。

クラスター4は、「けんかしてもすぐに仲直りできる」～「いっしょにふざけあったりして遊

ぶ」の2項目：「けんかしてもすぐに仲直りできる」は、クラスメイトのBとAがお互いにけんかしても謝る様子。「いっしょにふざけあったりして遊ぶ」は、クラスメイトのB、NとAがふざけている様子。クラスター4から、Aは、クラスメイトのB、Nに自分の考えや気持ちを表せるようになったことが分かる。

クラスター1と2の比較：共通点は、クラスメイトのB、Y、NがAにしてくれること。違う点は、クラスター1は、クラスメイトのBのかかわりが多く、クラスター2は、クラスメイトのBに加えてY、Nも含まれる様子が分かる。

クラスター1と3の比較：共通点は、クラスメイトのBとYがAに友達のことを教えてくれること。違う点は、クラスター1は、Aが家にいるときのことであるが、クラスター3は、学校にいるときのことである。

クラスター1と4の比較：共通点は、クラスメイトのBとYがAに話をしたり、情報交換をしたりする様子。違う点は、クラスター1は、Aが家にいるときのことであるが、クラスター4は、Aが学校にいるときのことである。

クラスター2と3の比較：共通点は、クラスメイトのBとYたちとAと一緒に行動する様子。違う点は、クラスター2は、クラスメイトのBが中心となったイメージであるが、クラスター3は、クラスメイトのYが中心となったイメージである。

クラスター2と4の比較：共通点は、クラスメイトのBとAが遊んだり、何かがんばったりする様子。違う点は、クラスター2は、走ったり、友達を呼びにいたりするなどAが苦手としていることに対して友達が解決してくれること、クラスター4は、Aからも友達に働きかけていけることである。

クラスター3と4の比較：共通点は、クラスメイトのBとAと一緒にいて楽しい様子。違う点は、分からないということであった。

〔被験者Aについての総合的解釈〕

クラスター1について：「時間割など教えてくれる」は、クラスメイトのBはAが学校を休んだとき時間割を教えてくれる様子。「何かをしているとき手伝ってくれる」は、クラスメイトのY

は、Aが重い荷物を持っているときなど手伝ってくれる様子。2001年の3月と比べると、クラスメイトのBが中心であるが、教室移動のときは、クラスメイトのYが声をかけてくれている。友達が見守っていることでAの友人関係は安定しているようである。〈見守り支えている友達〉を示すクラスターである。

クラスター2について：「いっしょに走ってくれる」は、クラスメイトのB、Y、Nが体育の時間にAと走ってくれる様子、「学校に行く前に呼びにきてくれる」は、クラスメイトのBが、Aを学校に行く前に呼びに来る様子である。Aは、「一緒に走ってほしい」とか「家に呼びに来てほしい」気持ちを強く持っているが、それをなかなか言うことはできない。そんなときの友達の心づかいにとっても感謝している。〈気にしないで付き合えるかかわりをしてくれる友達〉を示すクラスターである。

クラスター3について：「遊びにさそってくれる」は、クラスメイトのB、Y、NがAを休み時間に遊びに誘ってくれる様子、「いっしょに話をしたりするとき」は、クラスメイトのB、Y、NがAと友達のうわさ話をする様子、「おもしろい本とか教えてくれる」は、クラスメイトのB、Y、Nが図書室で本を紹介してくれる様子を表している。Aは、笑顔で友達のうわさ話をしたり、本の話をしたりする時の様子を説明してくれた。〈友達との楽しいひととき〉を示すクラスターである。

クラスター4について：「けんかしてもすぐに仲直りできる」は、クラスメイトのBとAはお互いにけんかしても謝ることができる様子、「いっしょにふざけあったりして遊ぶ」は、クラスメイトのB、NとAがふざけている様子を表している。Aは、このクラスターを説明するときたときあうとか言い合うなどの言葉を使った。クラスメイトのBやNとの関係において、Aは、自分の気持ちを思い切り出せるようである。〈気持ちを出せる友達〉を示すクラスターである。

全体について：全体の構造をクラスター間の関係としてみると、〈見守り支えている友達〉
→ 〈気にしないで付き合えるかかわりをして

くれる友達〉 → 〈友達との楽しいひととき〉
 → 〈気持ちを出せる友達〉と図式化できる。
 特にクラスター4から、Aは友人関係に自信を持
 ていることが伺える。Aにとって、友達は、寂
 しいとき支えてくれ、自分の内面を素直に表現で
 ける相手になっているようである。

3. 3. 2002年3月のPAC分析

AのこれまでのPAC分析での友達のイメージ
 は、特定の人に偏っていたり、行動面に見られる
 肯定的なイメージがほとんどであった。しかしな
 がら、Aが自分の内面を友達に表現できるよう
 になり、Aの友達に対するイメージも多様化してき
 ていると考えられる。また、2002年9月以降のA
 の教室内外での行動観察の結果も、積極的になっ
 てきている(後述)。

そこで、Aの友達のイメージの多様化を考慮
 し、連想刺激を「友達についてあなたが思うとこ
 ろはどんなところですか」に変えてそのイメージ
 について話してもらった。その連想項目およびク
 ラスター分析の結果は、Fig. 3のようになった。

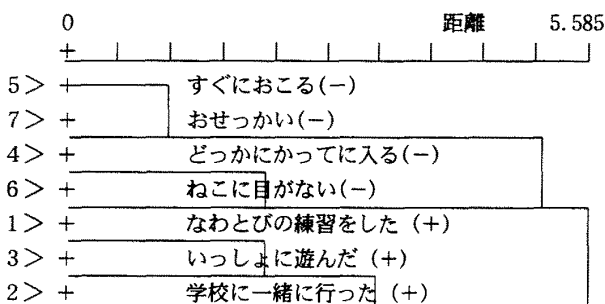


Fig. 3 2002年3月の被験者Aのデンドログラム
 1) 左の数値は重要順位
 2) 各項目の後ろの()内の符号は単独でのイメージ

〔被験者Aの重要順位と項目の+-イメージ〕

重要順位の高い順に①なわとびの練習をした②
 学校に一緒に行った③いっしょに遊んだ等とな
 る。友達に対するマイナスの気持ちもはっきり表
 れている。項目の+-イメージは、+が3、-が
 4とマイナスのイメージが強い。プラス項目数と
 マイナス項目数が拮抗しており、友達に対するA
 の葛藤状態の強くなっていることが伺える。

〔被験者Aによるクラスターの解釈〕

クラスター1：「すぐおこる」～「おせっか
 い」の2項目。「すぐおこる」は、クラスメイト
 のKが自分の考え通りにいかないとおこる様子。

「おせっかい」は、クラスメイトのKがAの洋服
 のえりを直すなど、おせっかいをやく様子。クラ
 スター1から、クラスメイトのKがおこったり、
 おせっかいをやいたりすることでAが困る様子が
 分かる。

クラスター2：「どこかに勝手に入る」～「ね
 こに目がない」の2項目。「どこかに勝手に入
 る」は、下校時にクラスメイトのBが人の家の庭
 に入って行く様子。「ねこに目がない」は、クラ
 スメイトのBがねこを見つけると追っかけ回す様
 子。クラスター2から、クラスメイトのBがねこ
 をずっと追いかけるためAは振り回され、なかな
 か家に帰れない様子が分かる。

クラスター3：「なわとびの練習をした」～
 「学校に一緒に行った」の3項目。「なわとびの
 練習をした」は、クラスメイトのB、K、Mがな
 わとび大会の前にAとなわとびをする様子。「一
 緒に遊んだ」は、クラスメイトのB、NがAとな
 んとなく遊ぶ様子。「学校に一緒に行った」は、
 クラスメイトのBとAが一緒に行く様子。クラ
 スター3から、クラスメイトのB、K、M、Nと一
 緒になわとびをしたり、遊んだりする楽しい様子
 が分かる。

クラスター1と2の比較：共通点は、クラスメ
 イトのKまたはBがAにすることで困ること。違
 う点は、クラスター1は、クラスメイトのKが学
 校でAにすることで、クラスター2は、クラスメ
 イトのBが学校帰りにすることである。

クラスター2と3の比較：共通点は、クラスメ
 イトのBがどちらのクラスターにもかかわって
 いるということ。違う点は、クラスター2は、クラ
 スメイトのBが勝手な行動をしてAがとても困る
 こと。クラスター3のクラスメイトB、K、M、
 Nと遊んだり縄跳びをしたりして一人でいるとき
 より楽しい様子を表している。

クラスター3と1の比較：共通点は、クラスメ
 イトのKがでてきてAと遊んだり、世話をしたり
 してくれる様子を表している。違う点は、クラ
 スター1は、クラスメイトのKがAに世話を焼い
 てくれること自体はうれしいが、腹を立てることが
 多いこと。クラスター3は、クラスメイトKが友
 達に腹を立てずにAも含めてみんなで楽しい様子

を表している。

〔被験者Aについての総合的解釈〕

クラスター1について：「すぐおこる」は、クラスメイトのKが思い通りにいかないとおこる様子。「おせっかい」は、クラスメイトのKがAの洋服のえりを直すなど、おせっかいをやく様子。Aは、クラスメイトのKの心づかいはありがたく感じているが、Kの強引さや感情表出には不快感を感じている。〈強引に接してくる友達〉を示すクラスターである。

クラスター2について：「どこかに勝手に入る」は、クラスメイトのBが人の家の庭に入っていく様子、「ねこに目がなない」は、クラスメイトのBがねこを探し回って、Aがなかなか家に帰れない様子。Aは昨年よりBとよく登下校し、そのことで勇気づけられることも多かった。その中で、Bが寄り道しながら帰ることに対して、「嫌だ」とAは言い出せないようである。〈感情と行動の不一致に困惑している自分〉を示すクラスターである。

クラスター3について：「なわとびの練習をした」は、クラスメイトのB、K、Mがなわとび大会の前にAと練習する様子、「一緒に遊んだ」は、クラスメイトのB、NとAが遊ぶ様子、「学校と一緒にいった」は、クラスメイトのBとAが学校に行く様子を表している。このクラスターでは、Aが友達に何かをしてもらうのではなく、クラスメイトのB、K、M、Nと一緒になわとびや遊びができることに喜びを感じている。〈友達と楽しく活動できている自分〉を示すクラスターである。

全体について：全体の構造をクラスター間の関係としてみると、〈強引に接してくる友達〉

→ 〈感情と行動の不一致に困惑している自分〉 → 〈友達と楽しく活動できている自分〉と図式化できる。Aは、運動や遊びを通して友達に自分から積極的に関わられることに喜びを感じつつも、友達へのマイナスイメージにも直面し、親友への両面価値を生じさせている。このようにAは、親友の要求に流されてつきあう自分自身に戸惑いを感じることで、改めて自分を振り返ることが可能になりつつあると解釈できる。

4. 考 察

小学4年生の頃の被験者Aは、運動を苦手としており、また、友達を作っていくことも苦手としていた。そのため、Aから進んでクラスの児童と遊んだり、話をしたりすることは少ない。そこで、担任教師とクラス児童は、Aが自然に活動に参加できるようになわとび大会を目標にして練習を続けていくことにした。2001年3月のPAC分析では、クラスターの2にはなわとびの練習でAがクラスの女子に励まされて勇気づけられたことが出ている。Aは、それまで友人にはクラスメイトのBに支えられている意識が強かったが、クラスのほとんどの女子の支えられたことは、大きな自信となったようである。

また、Aは、5年進級時に学級編成があり、4年時と同じように友人関係築いていけるかが心配された。しかしながら、2001年9月のPAC分析では、クラスター1、2を見るとAと同じクラスだったB、Y、Nと一緒に遊んだり、運動したりしてくれることでAは元気づけられている様子が見えかけた。また、クラスター4では、受身的であったAが、自分から友達に謝ったり、冗談を言ったりする積極的な姿勢も見受けられた。

9月以降は、AがPAC分析で挙げた友達を中心とし、音楽発表会、なわとび大会などの行事を利用してAの友達に対する積極的な姿勢を広げていく工夫をした。これまでの行動観察を通して、Aは、歌を歌うこと、ピアノを弾くことは得意であった。音楽発表会の練習では、高音部のリーダー的存在になり、本番でも素晴らしい歌声で歌うことができた。また、なわとび大会では、前述したように昨年度の経験を生かして担任も、クラス児童も二重とびの練習を続けるAを励ましていくことにした。その成果が実って、なわとび大会では、Aもクラスも好成績を残すことができ、Aは自分に自信が持ったようである。このような学級での活動を経たことで、2002年3月のPAC分析では、友人関係を多面的にとらえる必要性から、連想刺激を変えて提示している。クラスター1、2では、Aは、友達の行動に戸惑いを感じているようだった。また、クラスター3では、遊ばなわとびなどに参加できたことに満足できてい

るようである。9月のPAC分析と違う点は、Aが友達との関わりでの肯定的な側面ばかりでなく、否定的な感情にも言及できるようになった点である。

これらのことから、児童の行動の背景にある様々な欲求、意図、期待等を検討するためにも、児童の心理状態を考慮しつつ、提示する連想刺激を工夫することが重要であると指摘できよう。

5. 要約と結論

本研究の目的は、行動観察とPAC分析を併用することによって、2年間にわたって継続研究している児童の友人関係が学級編成後にどのように変化していくのかをとらえることと、連想刺激を変えることによって、被験者の内面にある友人関係をより多面的にとらえる可能性について検討することであった。

主な結果として、次の2点が明らかにされた。

1. 行動観察から被験者の概要をとらえることができ、さらにPAC分析から被験者の内面を細かく理解することができた。
2. 友人関係に関する連想刺激を変えることによって、友達へのマイナスイメージが隠されたメッセージとして伝達されたようである。連想刺激を変えたことは、Aにとって親友への両面価値を生じさせ、親友の要求に流されてつきあっている自分自身へのマイナス感情を生じさせているとみなせる結果を明らかにできた。

なお、今回の研究も、教育実践の中での過密なスケジュールをぬって実施された。そのため、PAC分析の実施については、他の測度との比較検討をする上で大きな課題が残された。また、PAC分析によるAの友人関係のとらえ方の変容は、Aの心身の成長発達から来るものと、連想刺激の内容の相違によるものとの相乗効果が考えられる。このことから、今後、児童の発達状態や教師の教示内容を配慮した実践研究を進めることが必要であろう。

引用・参考文献

- 榎本博明 1998 「自己」の心理学 ―自分探しへの誘い―サイエンス社
- 遠藤辰夫・井上祥治・蘭 千壽 1992 セルフ・エスティームの心理学 ―自己価値の探求―ナカニシヤ出版
- 内藤哲雄 1993 学級風土の事例記述的クラスター分析 実験社会心理学研究、33(2)、111-121
- 内藤哲雄 1997 PAC分析実施法入門 「個」を科学する新技法への招待 ナカニシヤ出版
- 内藤哲雄 2000 孤独感のPAC分析 ―接近・回避ループ型の事例― 日本心理学会第64回大会発表論文集、275
- 友生雅夫 1999 児童のセルフエスティームについての研究(1) ―児童の自己認知の肯定的な側面について― 九州心理学会第60回大会発表論文集、43
- 友生雅夫 2000 児童のセルフエスティームについての研究(2) 日本教育心理学会第42回総会発表論文集、479
- 友生雅夫 2000 児童のセルフエスティームについての研究(3) 九州心理学会第61回大会発表論文集、43
- 友生雅夫 2001 児童個々の態度構造の変容についての研究(1) ―友人関係に変容が見られた児童について― 日本教育心理学会第43回総会発表論文集、444
- 友生雅夫 2001 児童の個人別態度構造の変容についての研究(2) ―クラス編成に伴う友人関係の変容の分析― 九州心理学会第62回大会発表論文集、17
- 友生雅夫・今林俊一 2001 児童の友人関係に関する個人別態度構造の分析 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要 11、55-63
- 友生雅夫 2002 児童の個人別態度構造の変容についての研究(3) ―クラス編成後一年間の友人関係の変容の分析― 日本教育心理学会第44回総会発表論文集、313

付記：本研究の一部は、日本教育心理学会第44回総会(2002年10月)で発表を行ったものである。